

落梅集

七八

太政官文庫			
	七九一	和	
	四	書	
五	九	門	
三	函		
架	號		
冊			

内閣文庫			
	七九一	和	
	四	書	
七	函		
一	架		
冊			

内閣文庫			
番號	和	7914	
冊數	5 ( 4 )		
函號	170	73	



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

Vertical columns of handwritten Japanese text in cursive style (sōsho). The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. A faint red rectangular seal is visible in the upper right quadrant of the page.

Vertical columns of handwritten Japanese text in cursive style (sōsho). The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

Handwritten characters on the right edge of the left page.

唐極集卷之七

余德門別林

南政官

Red square seal impression at the top left.

明治九年購求

Main handwritten text on the left page, written vertically in cursive.













ふえふ方も入るはそ中銀元の柄ふもと紙か咲も及の  
方へ借紙幣の中村加賀も及も銀元の柄ふもとかけ紙  
時後使も及の幣力もと九押ひありし加賀も及のそり  
そえよ六押上り水銀元と忘布わきほよをわし  
愛中りよか咲も及のすもあつた紙よ左紙を右の紙  
はきりして押も及の人射し一宗用信如と成中と成連意  
何の借紙わきも及の紙よと有くよの幣力もとそえ左紙  
よ幣の上りも有くよの借紙も及の紙中世と紙の酒元者  
物も及のそりも及の紙よと有くよの幣力もとそえ左紙  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと

信も及の幣力も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと  
よの紙も及の紙よと有くよの紙よと有くよの紙よと





何れも其の境程更に申方の内をき人々の義兵と云く  
少くも事終つたらずに九節と云ふの間に申方の内をきと云  
其の如くも有らざらんして左の言ふ如くは  
御意代にありは申中をき人々の義兵と有しは申  
目と云ふ神祇好くも保料に後より外にはなき  
友と云ふ西田の法人と云ふの如くは信州小田原の  
こゝに申方の松平任重も其の義代の中より一戸田  
何れも其の境程更に申方の内をき人々の義兵と云く  
少くも事終つたらずに九節と云ふの間に申方の内をきと云  
其の如くも有らざらんして左の言ふ如くは  
御意代にありは申中をき人々の義兵と有しは申  
目と云ふ神祇好くも保料に後より外にはなき  
友と云ふ西田の法人と云ふの如くは信州小田原の  
こゝに申方の松平任重も其の義代の中より一戸田

義兵と云ふは其の如くも有らざらんして左の言ふ如くは  
御意代にありは申中をき人々の義兵と有しは申  
目と云ふ神祇好くも保料に後より外にはなき  
友と云ふ西田の法人と云ふの如くは信州小田原の  
こゝに申方の松平任重も其の義代の中より一戸田  
何れも其の境程更に申方の内をき人々の義兵と云く  
少くも事終つたらずに九節と云ふの間に申方の内をきと云  
其の如くも有らざらんして左の言ふ如くは  
御意代にありは申中をき人々の義兵と有しは申  
目と云ふ神祇好くも保料に後より外にはなき  
友と云ふ西田の法人と云ふの如くは信州小田原の  
こゝに申方の松平任重も其の義代の中より一戸田





人種死変りしと旅行ししと自ら人殺と云ふと云ひ  
お終ひて八連判し月毎と云ふと云はれば是れ  
必死の敵との内之と有し後より終ひたりと信する者あり  
合ふ中身西堂元大少佐の馬込河の長屋五人に居りて  
一紙紙西の元少佐二人文にて有と取れを同二人殺し  
之後と云ひしと有後と云ひしと有し押入者も五名  
之腹中より紙紙後より少佐と云ひしと有し百将元少佐  
一河少一確罪小中少佐と有し少佐が死をり終り  
老女も有し老女も少佐を殺し者先少佐の死をり終り  
く百将の死も少佐の死も一重重と云ひしと有し  
一重重の上より出仕をり少佐の死も一重重と云ひしと有し

やくち姑の自由いふ後と云ふ不及ありありと信する  
少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も  
二千六人の者先少佐の確罪小中少佐も少佐の死も少佐の死も  
とも少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も  
南河の少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も  
より少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も  
一八二意は少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も少佐の死も  
ありありと信する者ありありと信する者ありありと信する者あり  
ありありと信する者ありありと信する者ありありと信する者あり  
下午日の晩より日田信西堂元大少佐の死も少佐の死も少佐の死も



















尚德集卷八

一 関て曰 台徳院極御代阿加左後与及此字と宗下史公  
忠秋と水名高河の建也其良也念比成 上意と越之世と  
小おろそ小魚の江沙佐佐事と夫と天後中御の坊越に  
相如帝と元夫と為夢と為也高右左後与及元年の  
の此後之後而中御小後討以有るは是也  
大徳院極御代より寛永三年と同六年の儀と有るは  
也然るに右御字係りて多し公史より宗 台徳院極  
御側近の音付は甚く儀字多しと云ふは此と相重  
し事と云ふは御字係りて多しと云ふは此と相重

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



小右衛門長徳使のよこしに六月末のりしに八月を長衣迄まは  
せられたる事とすし日向海軍一字あはれの唐あそび八月廿  
四日申す者しそしひにやありき小右衛門  
も自らの取借よし右出字の事ハおぼく幸ひ也他書察  
判あふ右出字の書ハ忠秋と潤さるる事と幣付は九月  
斗もすまて一月中振付し事とすし長秋肥後守とす  
たすハ大ふかりは名義とすしはと唐右出字とす振付  
とすの振付とすもみしは忠秋忠秋申し振付とす  
一右とすも六月一に右出字とすし申す忠秋の上意は右の事  
忠秋とすしは八月に右出字とすし申す忠秋とすし申す  
林道春海軍也因留事也之難候ありきは秋出字とすし申す

八月廿四日申す者しそしひにやありき小右衛門  
も自らの取借よし右出字の事ハおぼく幸ひ也他書察  
判あふ右出字の書ハ忠秋と潤さるる事と幣付は九月  
斗もすまて一月中振付し事とすし長秋肥後守とす  
たすハ大ふかりは名義とすしはと唐右出字とす振付  
とすの振付とすもみしは忠秋忠秋申し振付とす  
一右とすも六月一に右出字とすし申す忠秋の上意は右の事  
忠秋とすしは八月に右出字とすし申す忠秋とすし申す  
林道春海軍也因留事也之難候ありきは秋出字とすし申す







中書入道子少下之年中に戸長下向也  
在徳院(西目見)在守事代より上徳正姉ケ何事  
そ子少下中書佐後多之介抱在守 在徳院極の出願  
如長は後大板を出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後  
再傳へ合着は後佐後年其出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後  
從りし而して之出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後  
夜為守の少下中書 出傳の出傳のしそ 出傳は後佐後  
一曾少下中書佐後之老大下佐後其ハ為守あり 出傳は後佐後  
少下傳の越と佐後其ハ為守あり 出傳は後佐後  
其後より若者としそ其友の出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後  
其後より若者としそ其友の出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後

少下中書入道子少下之年中に戸長下向也  
在徳院(西目見)在守事代より上徳正姉ケ何事  
そ子少下中書佐後多之介抱在守 在徳院極の出願  
如長は後大板を出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後  
再傳へ合着は後佐後年其出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後  
從りし而して之出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後  
夜為守の少下中書 出傳の出傳のしそ 出傳は後佐後  
一曾少下中書佐後之老大下佐後其ハ為守あり 出傳は後佐後  
少下傳の越と佐後其ハ為守あり 出傳は後佐後  
其後より若者としそ其友の出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後  
其後より若者としそ其友の出傳へ其ハ為守あり 出傳は後佐後

































